複合動詞「～トオス」の史的変遷—文法化に着目して—

人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

日本語日本文学コース 池田來未

複合動詞「～トオス」に関する先行研究は田中（2017）や姫野（2018）など複数存在するが、そのほとんどが現代語に関するものであり、通時的にどのような過程をへて、現在の用法を獲得したのかは明らかでない。

現代語では「～トオス」は「針で刺し通す」のように「通す」のもつ語彙的な意味（貫通）が多く残る例が存在する。一方、「1冊の本を読み通した」のように「読む」という動作を継続することを表す例も存在する。「読み通す」において〈貫通〉という「通す」のもつ語彙的な意味は薄れ、「通す」は動作を継続するという時間的な意味を表している。

このように語彙的な意味が薄れ、アスペクトを表すのは、複合動詞「～トオス」が時代とともに文法化していったからではないかと考えられる。

上記の仮定を基に、本研究では姫野（2018）の意味的分類を適宜修正・追加し、「～トオス」に〈貫通〉〈通過（行程）〉〈通過（視線）〉〈一貫継続〉という4つの分類を立てた。そのうえで、「～キル」について論じた青木（2010）を参考にしつつ、前項にくる動詞に着目しながら、上代から近代までの各時代でどのような「～トオス」の用法がみられるのかを調査し、文法化していく過程を明らかにした。

本研究の調査から、上代では「刺し通す」「射通す」などがみられ、ほとんどが〈貫通〉の例であることが分かった。中古になると、「見通す」「吹き通す」など視線や風といったより抽象的なものが空間を〈通過〉する例が増え、また中古には「誦し通す」など〈一貫継続〉の例も現れる。そして中世・近世になると「謠ひ通す」「（義理を）立て通す」など〈一貫継続〉の例が増え、近代にはさらに増える。

調査の結果、初期は物体が物体を突きぬける〈貫通〉が主だったものの、突きぬけるものが視線や風など抽象化されていくにしたがい、「～トオス」は物体だけでなく空間を通過することを表したり、時間を貫通・通過するように動作を継続的に行うことを表したりするようになることが明らかになった。

また、「～トオス」の前項を工藤（1995）にしたがい分類すると、〈貫通〉では「～トオス」の前項は動作に限界性をもつ「主体動作・客体変化動詞」が多いが、「～トオス」がより抽象的な関係を表すようになってくると、前項に動作の限界性をもたない「主体動作動詞」が多くなることも分かった。

「～スマス」「～ヌク」など似た意味を表わす複合動詞との比較も今後の課題である。

〈参考文献〉

- 青木博史（2010）「第2章 『～キル』の展開」『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房, pp.147-165
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系のテキスト—現代日本語の時間の表現—』（日本語研究叢書【第2期第7巻】）ひつじ書房
田中寛（2017）「終結、達成をあらわす複合動詞の一考察—『～トオス』、『～ツクス』、『～ハタス』を中心に—」『語学教育研究論叢』第34号, 大東文化大学語学教育研究所, pp.295-317
姫野昌子（2018）『新版 複合動詞の構造と意味用法』研究社